指図よりまず手本を

“教育”というと、今では直に学校教育のことを思い浮かべますが、教育は、本来、学校の仕事である以上に、親の仕事なのです。ところが、学校教育というものが始まってからというもの、教育は主として学校の仕事であり、親はわが子を良い学校に入れ、学費を出してやるのがその仕事であるかのようになってしまいました。

しかし、“教育”という字は、それが親の仕事であることを物語っています。“教”の古い形、父の古い形は上図の通りです。××〔kô〕は交わることを表わしていて、これが教の発音〔kyô〕のもとの音でもあります。

つまり、“教”とは、父と子とが交わることを表わした字です。父がその生き方をわが子に見せ、子はその父の姿から生き方を学び取ることを表わしています。

“育”は、子を逆さにした形の字と、肉〔niku〕とで作られた字で、この字の発音〔iku〕は肉のなまったものです。肉は食物の意味で、生まれ出た子供に食べ物を与えて、これを養い育てることを表わしたものです。

このように、教は父の仕事を表わし、育は母親の仕事を表わしていて、教育が親の仕事であることは、漢字の成り立ちがよくこれを明らかにしています。ところで、教育を子供の立場から見ますと、“学習”ということになります。

“学”は、“まなぶ”と読まれていますが、古語では“まねぶ”と言い、それは“まね（真似）る”の古語でもあります。つまり、親と子との交わりの中で、子が親の言行を見聞きしてこれを真似ることが“学”なのです。“習”は“ならう”と読まれていますが、今の“慣れる”の古語である“慣る”の延音（移るが移ろうと変化する例）です。だから「習うよりも慣れろ」という諺がありますが、実は“習う”ことと、“慣れる”こととは同じことの別の．言い方、裏表の関係の言葉です。同じことをくり返しくり返し練習し慣れることです。習うと慣れるとを合わせた言葉に“習慣”があります。

ところで、子供はだれでも、この“学習”が好きなように生まれついているものです。つまり、真似が大好きで、しかもこれが実に上手です。そして、その真似を何回でもくり返してやり、飽きるということを知りません。

論語の冒頭に「学んで時にこれを習う。また悦ばしからずや」とありますが、「学んだことを時々反復練習するようにしていると、それまで

出来なかったことがうまく出来るようになる。それが実に嬉しい」という意味です。

学習は、出来ないことを出来るようにするために、絶対欠かせない行為です。その大切な学習が、子供にはだれでも大好きなように生まれついているということは、正に神の配慮としか言いようがありません。

子供の“真似好き”に配慮を

子供が真似好きで、しかもそれを飽きずにくり返すという性質があるのですから、教育とは、「親が立派な言行をすべく努力する」の一語に尽きる、ということが出来ます。つまり、子供の目や耳の届く所では、言行に極力注意して、少しでも立派な親の姿を披露するように努力することです。

私は、十代で両親を相次いで失いましたが、私の記憶の中の両親は実に立派で、それが今でも私の良い手本になっています。今思えば、両親は、子供の私の前では醜い面を隠し、良い面だけを示すよう努力してくれたのではないか、と思われます。

私の善悪の判断の基準は勿論、いかに生くべきかの心構えの基礎は、すべて親の姿を見聞きする中で、自然に作られていったものです。これが、教育の真の在り方だと思うものです。

前に、「親は子供を助けるつもりで、実はこれをそこねていることが多い」ことを指摘しました。子供の能力は、子供自身が頭を働かし実践することにより、養われ育つものであって、親が子供の世話をやき、手を貸すことは、その成長を妨害するだけです。

ところが世の多くの親たちは、子供にいちいち指図してその行動を規制し親の思う通りの人間にしたがっています。これでは、思考力の乏しい、無気力な人間になるだけで、自主性のある頼もしい人間にはなれません。

すでに述べたように、子供はすべて、真似ること（学ぶ）、くり返す（習う）ことが好きなように生まれついているのですから、指図しなくても、進んで喜んで学習するのです。

だから、親が子供の目の届く所で常に読書していれば、子供もこれを真似て自然に読書するようになります。親がテレビばかり見ているようなら、いくら「本を読みなさい」と言ったところで、子供は決して本を読むようになりません。